

とーりまかし  
別冊

研究年鑑  
2020



# テーマ 5

運命の出会いをもたらし  
予想だにしない未来を生み出す

## コ・クリエーション型 関係人口

研究員

三田 愛

さんだ あい

「関係人口」とは、移住した定住人口ではなく、観光に来た交流人口でもない、地域や地域の人々と多様に関わる人々のことを指す。今日本では、関係人口が新たな地域づくりの担い手となることが期待されている。

じゃらんリサーチセンターが2011年から続けてきた「コクリ！プロジェクト」は、関係人口を先取りして研究してきたような取り組みだ。ただし、コクリ！プロジェクトが生み出してきたのは、通常の関係人口ではなく、

「コ・クリエーション型関係人口」である。

私たちは、コ・クリエーション型関係人口が運命の出会いをもたらし、その出会いが地域に奇跡を起こす現場を何度も目の当たりにしてきた。今回は、その奇跡がなぜ起こるのか、コ・クリエーション型関係人口をどうやったら増やせるのか、コ・クリエーション型関係人口づくりを妨げる「落とし穴」はどこにあるのか、といったことを研究してまとめた。その秘訣をぜひ参考にさせていただきたい。

研究員

三田 愛  
さんだ あい

### 第1章 目的

#### 関係人口の可能性を追求し 落とし穴を明らかにする

人口減少・高齢化により、いま日本中の地域が地域づくりの担い手不足という課題に直面しており、関係人口はその担い手となることが期待されている。その関係人口の可能性を追求するために、私たちがこれまで研究し、生み出してきた「コ・クリエーション型関係人口」の特徴や創出方法を明らかにする。これが今回の研究の第一の目的だ。

一方で、私たちはさまざまな地域と関わるなかで、地域にマイナスの影響を及ぼす関係人口を見た経験もある。このタイプの関係人口を生み出さないことも大切だ。では、そのためにどうしたらよいか。どこに関係人口の「落とし穴」があり、どうすればそれを避けられるのか。そのことについても研究した。

### 第2章 方法

#### 理論探究と実証実験の両輪で プロジェクトを進めている

コクリ！プロジェクトでは、理論探究と実証実験の両輪で研究を進めている。

理論探究：研究メンバーが、勉強会などを通じて地域変容・社会変容をいかに起こすかを研究し、新たな仮説理論を立てる。

今回、関係人口の理論を探究するにあたり、次の方々へインタビューを行った。●関係人口の専門家である指出一正氏（『ソトコト』編集長）、小田切徳美氏（明治大学農学部教授）●地域側で活動する北里有紀氏（熊本県南小国町黒川温泉）、大宮透氏（長野県小布施町）、齋藤潤一氏（宮崎県新富町）●都市から地域に関わる田村祥宏氏（EXIT FILM inc.）、島田由香氏（ユニリーバ・ジャパン・ホールディングス株式会社 取締役人事総務本部長）

※1 野村恭彦氏  
Slow Innovation  
株式会社  
代表取締役  
金沢工業大学  
(K.I.T.虎ノ門大学院)  
イノベーション  
マネジメント研究科  
教授  
※2 齋藤由香氏  
翻訳・ワークショップ  
ファシリテーター  
※3 太刀川英輔氏  
NOSIGNER代表・  
慶應SDM特別招聘  
准教授

表1

#### コ・クリエーション型関係人口に関する 主な実証実験の概要

“いち黒川”わっしょいプロジェクト  
場所：熊本県南小国町  
期間：2012年8月～2013年4月  
セッション回数：計9回  
参加者：青年部コアメンバー10名ほど、親会、農家、役場職員、県庁職員、旅館の女将やスタッフ、第二町民（東京・福岡・宮崎などから来訪）など  
ファシリテーター：三田愛

#### GI探究ジャーニーin海士町(コクリ！海士プロジェクト) 場所：鳥根県隠岐郡海士町

○第1回  
日時：2017年4月14～16日(2泊3日)  
参加者：海士町民30名(行政、漁業、高校、塾、観光協会、企業、ホテル、町長、副町長等)、コクリ！メンバー30名(官僚、全国の地域リーダー、大企業、コンサルタント、大企業経営者、教育、NPO、クリエイター等)  
ファシリテーター：野村恭彦氏<sup>※1</sup>、嘉村賢州氏、三田愛  
○第2回  
日時：2018年9月14～16日(2泊3日)  
参加者：海士町民30名(行政、漁業、高校、塾、観光協会、企業、ホテル、町長、副町長等)、コクリ！メンバー30名(官僚、全国の地域リーダー、大企業、コンサルタント、大企業経営者、教育、NPO、クリエイター等)  
ファシリテーター：齋藤由香氏<sup>※2</sup>、太刀川英輔氏<sup>※3</sup>、嘉村賢州氏、三田愛

実証実験：私たちは、仮説理論を検証する場として、2011年から日本各地で実証実験を行ってきた。今回は、関係人口に特に関係する2つの実証実験を紹介する(表1)。

なお、関係人口の理論探究は以下のメンバーとともに進めた。●嘉村賢州氏(NPO法人場とつながりラボhome's vi代表理事、東京工業大学特任准教授)●太田直樹氏(前総務大臣補佐官、New Stories代表)

### 第3章 結果

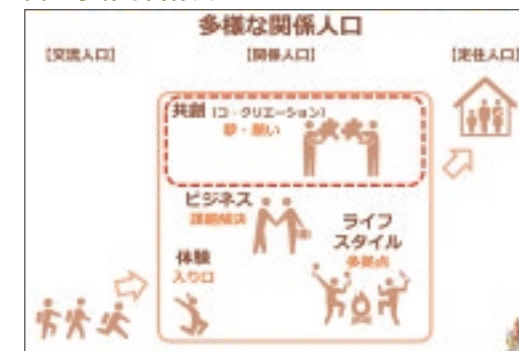
#### コ・クリエーション型関係人口は さまざまなかたちのなかの一つ

関係人口のかたちは多様だ。コ・クリエーション型関係人口はその一つである(図1)。まず大きな入口として「体験」がある。農業

体験やマラソン大会など、地域イベントに参加したことがきっかけで、その地域の関係人口になることは珍しくない。次に、「ライフスタイル」としての関係人口もある。最近、都心と田舎の2つの生活=デュアルライフ(二拠点生活)を楽しむ人々を「デュアラー」と呼ぶが、たとえばそうした皆さんのことだ。

また、「ビジネス」で地域に入り、関係人口に移行していく方々もいる。この研究では、このタイプを「コラボレーション型関係人口」と位置づけている。ゴール・KPI・明確なステップなどを設定して、ビジネス同様に想定通りの成果を出していこうとする関係人口で、コ・クリエーション型とはかなり質が異なる。ただし、両者はきっぱり分かれているわけではなく、コラボ型からコクリ型に移っていく方もいるし、普段はコクリ型だけれど、ある部分ではコラボ型で地域に関わるケースもある。善い悪いではなく、単に質が違うのである。

図1 多様な関係人口



#### コ・クリエーション型関係人口なら 地域に奇跡を起こせる

では、コ・クリエーション型関係人口とは何か。その最大の特徴は、「予想だにしない未来を生み出せる」ことだ。コクリ型関係人口では、明確なゴールやKPIを設定せず、生成的なアプローチで進め、関係性の「質」や「プロセス」を大切にしていく。そうすると、運命の出会いが起り、その出会いが地域に奇跡

※4 コクリ！の場では、基本的に肩書を外し、ニックネームで呼び合うことにしているため、本記事でも「ニックネーム(本名)」という書き方になっている

を起こすのだ。2つの事例を通して、それが具体的にどのようなことなのかを説明していく。

#### 事例①黒川温泉で起こったこと

私たちは2011年から熊本県南小国町と黒川温泉に関わってきた。黒川温泉は、30年前は地図にも載っていないような寂れた温泉地だったが、当時の旅館青年部の取り組みによって、2002年には120万人が訪れる人気温泉地に変貌を遂げていた。ただ一方で、2011年当時は10年連続で来訪者が減少する停滞期を迎えており、若手世代は旧来の手法だけが続けることに危機感を抱いていた。しかし、青年部は忙しかったこともあり、黒川温泉を成功に導いてきた親世代に対して、なかなか自分たちの意見を言いにくい状況にあった。



ゆうき(北里有紀氏・写真左)

2011年、私たちは黒川温泉観光旅館協同組合の青年部リーダーだったゆうき<sup>※4</sup>(北里有紀氏)と出会った。彼女たち青年部のメンバーたちと話し合うなかで始まったのが、「“いち黒川”わっしょいプロジェクト」だ。自分たちの意見を言いにくい現状を打破するためのプロジェクトである。

このプロジェクトの詳しい内容は「とーりまかし33号」に掲載しているが、従来とはまったく違う対話の場を創った。たとえば、これまでの黒川温泉の会議は、ロの字型に座って、声の大きい親世代が中心になって話すスタイルだった。また、旅館組合以外の商店・農家・役場などの人たちが、その会議に加わることもなかった。そこで、「いち黒川」わっしょいプロジェクトでは、ロの字型を一切止めて、みんなが思いでつながりやすい場を用



意した。そして、旅館組合だけでなく、農家・商店・役場・県庁などのメンバーにも対等な立場で参加してもらったのだ。その調子で、月1回、9カ月間にわたる対話セッションを実施した。



「いち黒川」わっしょいプロジェクトの様子

その結果、何が起きたかという、第一にまちの世代交代が一気に進んだ。象徴的な動きは、2015年、ゆうきの仲間の一人が42歳で新町長になったことだ。また、ゆうき自身は、黒川温泉観光旅館協同組合の史上最年少(37歳)・初の女性代表理事になった。

それから、コ・クリエーション型関係人口の「第二町民」がたくさん生まれた。2016年の熊本地震の際には、この第二町民の皆さんが黒川温泉に100人のライターを集めるイベントを開催し、その参加者が観光体験をブログなどで報告。キャンセルが相次いだ旅館の客数向上に大きな貢献を果たした。

さらに、まちの皆さんが都会のクリエイターと協力し、「KUROKAWA WONDERLAND」という映像作品を制作。予算はなし。お互い持ち出しのGive&Giveの関係で制作し、出演者はほぼ南小国のひとたちだった。場所の許可なども南小国側メンバーが取るなど、本当にまちの皆さんとクリエイターだけでつくったものだ。このKUROKAWA WONDERLANDは、ミラノ・ロサンゼルス・スペイン・インドネシアなどで15以上のアワードを受賞。大きな話題になって、観光客の誘致にも一役買っている。加えて、このプロジェクトがきっかけで、消滅の危機に立

たされていた南小国の吉原岩戸神楽が次世代に継承された。

南小国町と黒川温泉では、コ・クリエーション型関係人口の存在によって、こうした「予想だにしない出来事」が次々に起きている。



KUROKAWA WONDERLAND

#### 事例②海士町で起こったこと

島根県海士町は、隠岐諸島の一つ・中ノ島にある人口2000~3000人くらいのまちだ。そのうちIターンが約600人もいて、彼らもまちの力となってCAS・岩牡蠣・隠岐牛などの産業を大きくするとともに、島留学・高校魅力化などの教育に力を入れるなど、さまざまな施策にチャレンジする島として知られている。そこで2017年から取り組んだのが、コクリ！海士プロジェクトだ。



第1回コクリ！海士

当時、海士町は第二変容期を迎えていた。4期16年にわたって町を盛り上げてきた山内道雄前町長の引退を間近に控えており、ともにリードしてきた課長陣も数年以内に退職することがわかっていた。また、一部の人材に負荷が集中しており、UIターン者が疲弊する

ことも起きていた。さらにいえば、力を入れてきた交流も、まだ点から線につながらずに伸び悩んでいた。地方創生の先進事例として知られている海士町だが、実は将来が描きにくい閉塞感があったのだ。そこで、コクリ！海士プロジェクトを開催することになった。

コクリ！海士プロジェクトは、2017年4月と2018年9月の2回開催。地域からは観光・漁業・役場・福祉・教育・商店などの次世代リーダーが30名ほど、地域外からは企業経営者・大学教授・官僚・編集者・出版・プロデューサー・他地域の自治体職員など30名ほどが参加して、2泊3日対話し続けた。地域内も地域外も、集まったのは忙しい方ばかり。そうした方々がコ・クリエーションの場に価値を感じ、貴重な時間を空けて参加してくれた。



第1回 コクリ！海士の風景

その結果として何が起きたかという、まず初回のコクリ！海士の3日間を見て、山内前町長が「(ずっと心配していたが)これで海士町の未来は大丈夫だ！」と涙を流された。また、まちの主要産業である観光ホテルの経営者に30代の青山敦士氏が抜擢されるといった変化が次々に起きた。海士町で30代が主要企業の経営者になったのは史上初だ。



山内道雄前町長

それから、コクリ！メンバーの一人である英治さん(原田英治氏・英治出版代表取締役)が、1年間親子島留学で海士町に住み、東京との二拠点生活を実行したのも大きな出来事だった。英治さんは、東京から6時間もかかる島に、世界銀行元副総裁の西水美恵子氏、世界的ファシリテーターのアダム・カヘン氏といった名だたる著名人を何人も呼んだ。その滞在期間は、全員合わせて200泊にも及んだという。また、英治さん自身も島の人たちに直接大きな影響を与えている。



英治さん(原田英治氏)

#### コ・クリエーション型関係人口の5つの「ポイント」

これまでに示したようなコ・クリエーション型関係人口は、どうすれば作れるのか。実は次の5つのポイントさえ押さえれば、十分に実現が可能だ。これらのポイントを押さえれば良いプロセスを実現できたら、必ず予想だにしない未来が何かしら立ち現れてくる。

##### ①フラットで対等な関係性

一番大事なのは、「都会の人たちを先生や主役にしないこと」だ。都会の人たちに地域課題を解決してもらうのではなく、地域内外の人たちが一緒になって「ともに地域の未来を創ろう！」「一緒に何かを生み出そう！」というスタンスで関わるのが大切だ。その大前提として、フラットで対等な関係性が欠かせない。その象徴として、私たちは肩書きではなく「あだ名」で呼び合っている。そうすることで、人と人との関係ができていくからだ。

たとえば、第1回コクリ！海士では、最初に「綱引き」を行った。綱引きは、海士町では



毎年隠岐島綱引大会が行われるくらい盛んなイベント。綱引きから始めて、できるだけフラットで対等な関係を作ろうとしたのだ。



第1回コクリ!海士での綱引き(左が関係人口チームで右が海士町チーム)

フラットで対等な関係性をつくる上でもう一つ大切なのが、「事前の一人ひとりとの対話」だ。コクリ!海士では、主催者メンバーが海士町メンバー全員と事前に1時間ほど直接会って場の意図を説明したり、相手の状況をヒアリングしたりした。

②根っこでつながる

コクリ!プロジェクトでは、「根っこの想い」でつながることを大事にしている(図2・3)。根っこの想いとは、簡単に言えば、自分

図2・3 根っこでつながる



の夢や願いのこと。自分のハラや丹田、源で感じていることだ。自分の根っこにつながると、自分の生まれてきた意味を実感し、内なるエネルギーが温泉のようにこんこんと湧き出続けてくる。ふだんこの想いを意識する時間はあまりなく、自分の根っこを忘れていたり、わからなくなっていたりする方も少なくない。コクリ!では、内省したり、身体の声の聴いたりして、自分の根っこにつながる時間を大事にしている。

さらに私たちは、「仲間の根っこ」とつながることも重視している。そのためにコクリ!海士では、3日間をともにする6~7名の「ホームチーム」を用意した。一生の仲間となれそうだと、というチームをつくったのだ。そして、ホームチームでお互いの根っこを語り合う「ストーリーテリング」の場を設け、まる一日くらいかけて、自分と仲間の根っこにつながってもらった。こうやって自分と仲間の根っこにつながることで、その後のコ・クリエーションの原点、原動力となっていく。



海士町メンバーの自宅で、自分たちの根っこを話し合うコクリ!海士のホームチーム

③ワクワク・楽しむ・熱量(オーナーシップ)

3つ目に大事なのが、「地域の人を楽しんでやりたいことをやる」ことだ。地域外の人やりたいことを応援するのではなく、自分たちが「ワクワクするか」「楽しいか」「熱量を持って取り組めるか」を基準にして行動を起こすのだ。そうすると、その熱量が、地域内外の人たちに伝播していき、地域外の人たち

とどうやってコ・クリエーションすればよいのかも見えてくる。

黒川温泉では、地域に関心がある都会の人たちを、お客さんではなく「第二町民」として巻きこみ、フラットで対等な関係性を築いていった。そのなかで、法被を着てイベントの裏方を手伝う、人の家で飲み明かすといった「第二町民的な旅」が生まれたのだ。その結果、第二町民は新たなふるさとを創ることができ、地域の皆さんは都会の人たちとフラットな関係で楽しめることを知った。KUROKAWA WONDERLANDも一緒に、黒川側とクリエイター側が根っこでつながり対話をするなかで、「世界に打って出る映像をつくりたい!」という願い・夢が生まれた。こうしたコ・クリエーションは、地域外の人たちに委ねては決して起きない。地域の皆さんがオーナーシップを持つことが絶対に欠かせない。

④お互いが進化(自己変容)

4つ目に、こうしたコ・クリエーションを経て、参加者がお互いに影響を受け合い、価値観が変化したり、人生が変化していったりするの、コ・クリエーションの大きな特徴だ。

たとえば、コクリ!海士では、海士町のべっく(阿部裕志氏)と東京の英治さんが出会った結果、べっくは海士町で新たに出版事業を始めようとし、英治さんは海士町に1年間移住する変化を起こした。海士町に1年間移住して10年ほど、海士町の中心的存在として活躍してきたべっくだが、あるコクリ!の場で「自分は限界だ。このままでは燃え尽きてしまう」と気づいた。それからは、休日にお米づ



べっく(阿部裕志氏)

くりをしたり、自然とつながる時間を大事にしたりして、暮らし方を変えた。また、会社の事業も整理し、会社名も「巡の環」から「風と土」へ変更。本当に自分が使命を感じることに注力していくようになった。地域づくりのリーダーが自己犠牲を払って疲弊してしまうケースが多いなか、彼の変容は大きい。

⑤受け皿の多様性とキャパシティ

そうした場を創ることで、コクリ!が増やそうとしているものの一つが、「主体的に外とつながる地域住民」だ。

なぜなら、少数の地域リーダーが地域外と持つつながりの数には、一定の上限があるからだ。コ・クリエーション型関係人口を多様に増やそうと思ったら、自ら外とつながろうとする地域内の人たちを増やす必要がある。私たちは、そうした主体的な地域住民の皆さんの「受け皿」を増やすことを大切にしている。受け皿となる地域の皆さんが増えるほど、コ・クリエーション型関係人口のキャパシティも大きくなっていく。

言い換えれば、コクリ!海士のような取り組みは、「面の関係人口」をつくるための試みなのだ。たとえば海士町では、これまではべっくをはじめ、地域の受け皿は数名しかいなかったが、コクリ!海士によって、関係人口メンバーが会いに来る地域の人たちが、これまで受け皿となっていなかった海士町メンバーを含む数十名へと増加した。そうやって地域側の主体性を高めていくことが、結果的に関係人口の質を高めることにつながるのだ。

関係人口の5つの「落とし穴」

一方で、コ・クリエーション型関係人口づくりを妨げる「落とし穴」もある。なかでも特に避けたいのが、次の5つの落とし穴だ。なお、これらは主に指出氏、小田切氏へのインタビューから得た知見である。

①数を追わない

関係人口数が増えれば地域が変わるとい

のは明らかな間違いだ。関係人口は数よりも質のほうがずっと重要で、英治さんが良い例だが、コ・クリエーション型関係人口は一人の存在が地域を変えていくことが珍しくない。

#### ②移住をゴールと考えない

最初から移住をゴールにしている人はごく少数で、移住は結果にすぎないというケースが多い。そのため、地域側も移住をゴールと考えないほうがよい。それに、関係人口が別の地域に住んでいるからこそ、違う風（リソース・価値観など）を地域にもってこられるのだ。移住をゴールにすると、その多様性を消してしまうことにもつながりかねない。

#### ③ファンやサポーターと捉えない

ファンやサポーターには当事者意識はあまりないが、関係人口には当事者意識がある。ここが両者の大きな違いだ。関係人口の多くは、そのまちのことを、まちの人たちと一緒に真剣に考えていく人たち。だからこそ、お客さん扱いをしたり、消費者扱いをしたりせずに、一人の人として遠慮せずに接することが大切だ。

#### ④単なる労働力と捉えない

関係人口を「単なる労働力と捉えない」ことも大事だ。相手を労働力だと思っていて、良い関係を築けるわけがないからだ。

#### ⑤類義語を増やさない

関係人口をブームで終わらせないためには、関係人口という言葉を大事にすることも大切だ。「つながり人口」「複業人口」などの類義語を増やさないほうがよいだろう。

## 第4章 考察

### 運命の出会いが 地域に奇跡を起こす

9年間、地域コ・クリエーション研究を続けてきて、最も強く実感しているのは、「運命の出会いが地域に奇跡を起こす」ということだ。研究者の私自身、黒川温泉のゆうきをはじめ、

運命だと思う出会いから人生が変わり、生み出すプロジェクトが変わっていった。そして、たった一人でも運命の出会いがあることで、「地域の人生」もまた大きく変わっていくのだ。その変化の可能性は計り知れない。

もしかしたら、地域で活躍する皆さんの多くは、すでに「地域の運命の人」に出会っているのかもしれない。しかし、正しいプロセスを経ないと、その出会いも潜在的なものに終わってしまいかねない。ぜひ対等でフラットな、根っこでつながるプロセスを経て、関係性を深めていってもらえたら嬉しい。運命の出会いを逃さないでほしい。

一方で、地域と深いつながりをつくることは、地域外、特に都会に住む人にとっても大きな喜びで、彼らが生み出す成果の質が変わっていったりすることも少なくない。都会も地域も双方が活かされる、そんな関係人口が増えていくことを心から願っている。

関係人口の施策を考えるとき、ここで紹介した5つのポイントのエッセンスを少し入れるだけでも、きっと状況が変わってくるはずだ。また、5つの落とし穴を意識すれば、施策が悪い方向に進むリスクを減らすことができるだろう。少しずつでまったくかまわないので、ぜひ試していただきたい。

たとえば、いわゆるアイデアソンのように、地域の課題を出し、関係人口側がアイデアを考え、地域の人たちにプレゼンをする、という関係人口施策をよく目にする。その初日に、地域と関係人口の人たちで互いを知り合ったり、根っこのストーリーテリングをしたりする時間をとるだけで、施策全体がコ・クリエーション型に少し変わるはずだ。

このようにして、地域の現場で何度も使うことを繰り返して、コ・クリエーション型関係人口の創り方を自分のものにしていただけたら、それほど嬉しいことはない。さまざまな地域にコ・クリエーション型関係人口が広まることを願っている。